

(こびとの囁き その3 ズドン)



転校して、教壇の脇にたつて挨拶をしてすぐ、小太郎君は言いようのない恐怖に襲われま
した。

教壇脇から教室を見回して、新しい友達の様子を見るやいなや、まるでそれが今までの
友達と違っていることが一目で分かったからです。

変な言い方ですが、みんなの前に立っている自分の姿が、今までテレビで見っていた「白馬
の剣士」に出てくるお百姓さんの小せがれで、つんつるてんの半纏（はんてん）に草履を突
っかけて青洩（あおばな）を垂らしているように見え、それが、半ズボンで皮靴を履いた西
洋の子供の前に立たされ、ためつ、すがめつ値踏みされているような感じがして、恐れおの
のいてしまったのです。

それが曲がり角の向こうの最初の景色でした。

多少想像はしていたのですが、実際にそうなってみると、想像を遙かに超えて「辛い」も
のを小太郎君は感じたのです。

「どえらいところに来てしまったぞ」

そんな折、転校して一週間が経ったある日のホームルームの時間のことでした。先生が教
壇の上から

「先週のこの時間に先生は芥川龍之介の「蜘蛛の糸」というお話をしましたね。極悪人のカ
ンダタでしたが、一回だけ蜘蛛を助けたのをお釈迦様が覚えておいでになって、蜘蛛の糸を
地獄に垂らして、救おうとなさったのですが、自分の下から地獄の亡者どもが上がってくる
のを見て、糸が切れたらまた地獄に墜ちると怖れたカンダタが、自分の下の糸を切ったのを
お釈迦様をご覧になって、カンダタの上の糸を切っておしまいになったと言うような話で
した。

ところでみなさんは、このお釈迦様のなさったことをどう思いますか？当然だと思う人、そ
れはひどいと思う人、それぞれに手を上げてくださいね、じゃあ、まず」

小太郎君はたまげてしまいました。

実は小太郎君は前の小学校の同じホームルームの時間に「蜘蛛の糸」の話を聞かされて知っていました。しかし、その時の先生の質問は、カンダタのことをどう思いますか？と言う質問で、その答えは直ぐに思いついたのです。しかし、蜘蛛の糸を切ったのがカンダタではなくてお釈迦様で、それをどう思うかの話など考えたこともありませんでした。

周りを見ると、新しい同級生達が、何のためらいもなく意図も平然とそれぞれの意見に手を上げています。しかも、元気よく。

「レベルが違う。ついて行けない」

そんなわけで、小太郎君は先生の一回目の質問にはテスラあげることが出来ませんでした。

先生は、

「それじゃ、しばらく考えて、もう一度後で挙手を取りますから」

と言って、しばらく間を置きました。

そうして、幾分時間が経った後、また同じ質問をしました。

小太郎君は、どちらに手を上げて良いのかさっぱり分からなかったので、目立たないようにおそるおそる両方に手を上げました。

先生は

「それでは、来週は何故そちらに手を挙げたか、皆さんの意見を訊いてみたいと思います。よく考えてきてくださいね。では、今日はこれでおしまいにします」

なんか小太郎君は「生きた心地」がしませんでした。それでホームルームが終わるとぐったりしてしまったのです。

しかし、その日はそれだけでは済みませんでした。

小太郎君は、ぐったりした心に少しでもきれいな空気を入れようと、息を吸いに校庭に出ようとして立ち上がりかけたその時、ひとりの男の子がやってきて言いました。

「君！」と言ったのです。

おまえではなく、名前でもない呼び方をはじめて耳にしたので、ちょっと驚きました。そうしてその後で

「はつきり手を挙げなよ。どっちか、はつきり。どっちつかずじゃ情けないと僕は思う」と言いきると、すたすたと自分の席に戻っていったのです。当然周りに居た人たちにもその話は聞こえていたはずですよ。

その少年は、いつも見ている漫画の「おそ松くん」の登場人物の一人になぞらえて級友がつけた「ちび太」というあだ名のこのクラスの学級委員長でした。普段はふざけてばかりいるのですが、アタマが抜群に良くて、自分の意見もはっきり持っている子でした。

小太郎君は、ちび太君が自席に戻った後、恥ずかしさと情けなさで激しく動揺しました。同時に動揺しているのを必死に隠して平静を装いました。

「進学校の級長さんは全然違うんだな。そんなところまで見てるなんて」

おそらくちびた君は転校間もない新人がどんなヤツなのか、ある程度注意を払っていたから、そういうことに目が行ったのかもしれない。

しかし、小太郎君にはそんなことを考える余裕は全くありませんでした。

「お主、見たなく。生かしてはおけぬ」

普段は、のほほんとしている小太郎君でしたが、その時ばかりは、まるで悪人が抱くようなような気持ちになったのです。

それは、今まで味わったことのない初めての感情でした。小太郎君は、その感情の芽生えに少したじろぎ、それを過ぎると、自分がなんか、だんだんイヤなヤツになっていくような気がして、悲しくもなりました。

たった一週間しか経っていないのに、小太郎君は自分が、とてつもなく遠い世界に来てしまったような気がしました。

「なんか違う。なんかおかしい。なんか僕じゃない」

小太郎君は、ぼんやりとですが、説明しようのない違和感を覚えました。しかし「違和感」などという言葉を知らない小太郎君は、居心地が悪いな位にしか捉えることが出来なかったのです。

小太郎君は、その居心地の悪さよりも「みるみる減っていく自信」のスピードの速さにはささか慌てふためいていて、それどころではなかったのです。

正直言って、小太郎君は、早く家に帰ってこたつに潜って眠ってしまいたいような気分でした。

しかし、そんなときに限って頭が良くて、大きな身体のお父さんが、あの日お風呂から上がってきて、小太郎君に言った言葉を思い出したのです。

「おまえは井の中の蛙大海を知らずだ。井戸の中の蛙はそれがすべての世界だとのぼせ上がっているが、それは外の大きな海を知らないだけの話だという意味だ。大きな海に行って荒波にもまれてこい。そこで何があっても逃げるんじゃないぞ！戦争では、敵の前から逃げ出したら、後ろから味方にズドンと撃たれるんだ。いいか、逃げ出すんじゃないぞ。卑怯者になるな。分かったな」

小太郎君はそれを思い出して、必死にこらえました。「ズドン」という音の響きと「卑怯者」という言葉が、耳元で何回も鳴っていました。

後年、年老いた小太郎君は、このときのことを思い出して、苦手を逃げずに乗り越えると言うことと、その乗り越えた道が、自分に合っている道かどうかと言うことは全然違うことなのに、それを一緒にしてしまったのがいけなかったな。あの「ズドン」は効き過ぎた、と思ったそうです。

時に小太郎11歳。成人の日の祝日、前日のことでした。